埼玉県における古代火葬墓
－武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に－

西田真由子

要旨　埼玉県内の火葬墓を蔵骨器や蔵骨器の蓋、埋葬施設の３項目について分類を行い、県内の火葬墓の地域性を整理し、地域における火葬の導入について検討した。北武蔵では８世紀中頃を火葬墓の導入期とし、８世紀後半から９世紀にかけてが展開期とすることができる。導入期は短頸壺を蔵骨器とする火葬墓が各地域でみられ、展開期は東側の地域は土師器を蔵骨器とし、西側の地域は須恵器を蔵骨器とする傾向がある。さらには武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓に特徴的にみられる土器被覆の火葬墓について他地域の例と比較した。

はじめに

古代の墳墓は火葬墓・土坑墓・合口甕棺墓・古墳を再利用したものなどがみられ、地域や時期により各墳墓の盛行した時期が異なることで知られる。本論では埼玉県(北武蔵および下総国の一部)の火葬墓に焦点を当て、県内の各火葬墓が持つ要素を分類し、各小地域や遺跡での火葬の導入ついて検討するとともに、火葬墓の密集地域である川口市域の火葬墓について、他地域との比較からその性格を探り基礎的研究としたい。

１．火葬墓の分類

分析では蔵骨器・蓋・埋葬施設の３項目に着目し分類を行い、年代・地域別の特徴を捉えてゆきたい。

なお、本論で扱う火葬墓とは火葬骨が収骨され容器や土坑内に納められたものを火葬墓とする。基本的な考え方は小林義孝の「火葬墓の分析的視覚」による定義に従うものとする（小林 1999)。

１－１．蔵骨器の身部の材質および器種分類

蔵骨器は灰釉陶器・須恵器・土師器が採用されている。蔵骨器の材質は、火葬墓の被葬者の身分差、その地域の土器の流通状況や、造墓集団の嗜好を表していると考えられる。

蔵骨器の材質および器種を分類したものは以下の通りとなる（第１図)。

Ａ類　須恵器短頸壺

８世紀中頃の薬壺形の短頸壺は、鳩山町兎山出土の蔵骨器や川越市鯨井新田出土のものがあげられる。そのほか川口市叺原遺跡、９世紀前半の同市赤山陣屋跡遺跡で出土している。

Ｂ類　灰釉陶器短頸壺

１例のみの出土で、富士見市八王子富士塚で発見されている。９世紀初頭から中頃である。

Ｃ類　須恵器甕

嵐山町越畑城跡跡・鳩山町大平遺跡等で出土している。８世紀後半から登場する。

Ｄ類　須恵器壺

東松山市物見山遺跡では底部穿孔がなされた丸底の壺が出土しているほか、富士見市松山遺跡で例がある。８世紀後半から現れる。

Ｅ類　須恵器長頸壺

さいたま市・川口市・春日部市域で出土している。８世紀前半から登場する。これらの器種を採用する火葬墓では春日部市浜川戸遺跡を除き頸部が打ち欠かれている。

Ｆ類　土師器甕

８世紀前半から登場するが、主体となる時代は８世紀後半から９世紀代で、武蔵型甕を蔵骨器とする。東松山市東山遺跡、川口市叺原遺跡、同市安行吉岡立ノ崎遺跡、同市赤山陣屋跡遺跡で出土している。

G類　フラスコ瓶・提瓶

行田市で火葬骨が詰められた7世紀代の横瓶が出土している。埋葬施設については不明である。

転用して蔵骨器とし利用されてもおかしくない年代のものであるため、分類に加えた。

H類　蔵骨器なし

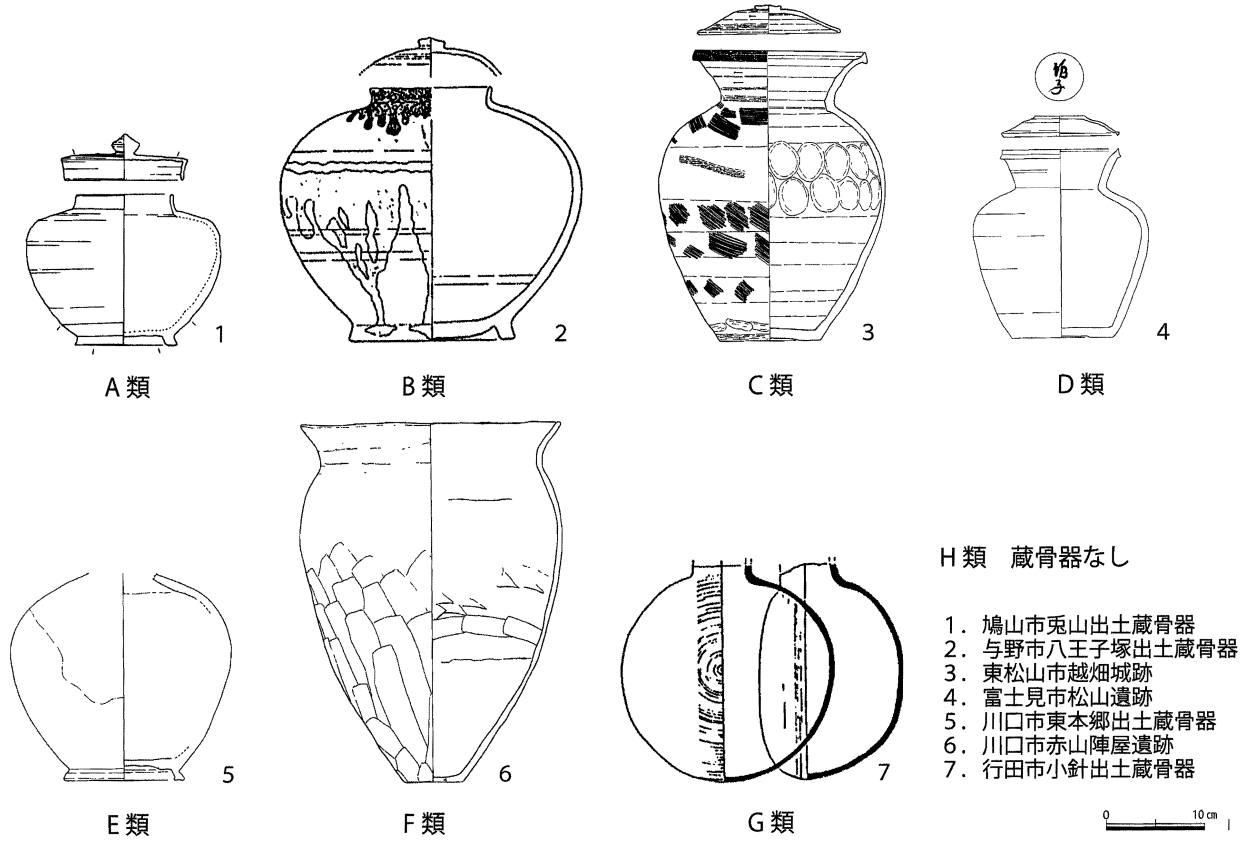
火葬骨を布袋などの有機物に入れているか、土坑内に直接火葬骨を納めているものである。

確実な事例としては川口市叺原遺跡3号墓があげられる。3号墓は土坑内に炭化物が集中する箇所があり、下面に蓋だけが置かれた状況で出土している。また、鳩ヶ谷市三ツ和遺跡では特殊土坑という名称で報告されている4基の土坑がある。火葬骨が土坑内に散り、複数の土器が破砕された状況で出土している。同様の例が叺原遺跡でも検出されており、「散骨タイプ」の火葬墓であるという意見がある（春日 2000）。荼毘跡に残った火葬骨や炭化物などをまとめて土坑内に入れた遺構である可能性も考えられ、火葬墓であるかどうかについても検討する余地がある。

1－2．蔵骨器の蓋・外容器の有無

埼玉県内の蔵骨器の蓋や外容器は多様性に富んでおり、その複雑さは火葬墓に関する儀礼の結果の表れともいえる。ここでは、蓋や覆具について分類した。分類に際しては1類の蓋なし・2類の蓋・3類の土器被覆・4類の外容器の4つの項目に分けている。各項目の分類基準は以下の通りである。

1類の蓋とは土器の器種構成における「蓋」を指すのでははく、火葬骨を納めた身部に対し封をする役割を持つものに対し蓋と呼ぶ。2類の土器被覆とは、蔵骨器に土器を被せるもので蔵骨器を入れる外容器とは区別した。蓋との違いは、蔵骨器の身部の口縁部に対して2倍以上の大きさを持つものとした。3類の外容器とは、火葬骨の入った蔵骨器を入れる容器の事で、入れ子になるもの



第1図　蔵骨器の分類

とした。

なお、火葬墓の残存状況が悪く、蓋の有無がわからない事例と、出土状況からみて副葬品と考えられる土器は除外した（削平を受けて蓋や覆の有無がわからないものは※をつけている）。

１－①　蓋なし

蓋を持たない火葬墓である。傾向としては蔵骨器を倒立させた火葬墓のほか、蔵骨器を持たない火葬墓に多い。布や革等の有機物の封がなされていた可能性も考えられるが、県内ではその痕跡が確認できた事例はない。

１－②　蓋なし＋土器被覆

蓋はないが、土師器甕の胴部上半を打ち欠いたもので土器被覆をしている。

１－③　蓋なし＋土器被覆（二重）

胴部上半を打ち欠いた土師器甕を二重重ねて覆いとするものである。

１－④　蓋なし＋甕

土器被覆とは異なり、１－④は完形の甕を逆さにして蔵骨器の口縁部にのせるものである。

２－①　蓋のみ

須恵器蓋や坏でもって蔵骨器の身部を封口するものである。蓋と身がセットとして作られているものと、別々に作った蓋と身を組み合わせて利用するものがある。前者はＡ類に認められ、後者はＡ～Ｆ類に認められる。坏が蔵骨器の身部内に納められているものもあるため、２－③類とは区別した。

２－②　蓋（須恵器蓋）＋坏

蓋となる土器と、須恵器坏をもって蓋としているものである。蔵骨器の身部の口縁部に蓋と坏の組み合わせが最も多く、他には盤を蓋としている深谷市宮林遺跡例が確認されている。

２－③　蓋が２点以上

蓋を２点以上重ねて埋納するもので、須恵器蓋で封をする川口市叺原遺跡６号墓例がある。

２－④　蓋＋土器被覆

須恵器蓋で蔵骨器身を封をし、胴部上半を打ち欠いた土師器甕を被せるものである。

２－⑤　蓋＋甕

２－②と同じく土師器甕を利用するが、完形の甕を身部に乗せているものである。

３　蓋＋外容器

川越市鯨井新田出土の蔵骨器と、川口市赤山陣屋遺跡で出土している。２例ともＡ類の短頸壺を蔵骨器とする。鯨井新田の例は須恵器鉢と胴部上半を欠損した須恵器甕を組み合わせ蔵骨器とする。

他の火葬墓の被葬者よりも、比較的優位な立場にある被葬者が採用していたと考えられる組み合わせである。

１－３．埋葬施設

ⅰ槨を有するもの

蔵骨器の周囲を板石で囲む本庄市寺山遺跡例、玉石を周囲に巡らせたとされる川越市鯨井新田例がそれぞれ１例ある。詳しい出土状況の記録はない。

ⅱ土坑

円形の土坑内に蔵骨器を納めるものである。土坑にもパターンがあり、土坑を掘った後に、底面に土を充填し蔵骨器を据えているものと、蔵骨器をある程度まで埋めて据えるものがある。宮林遺跡例は蔵骨器を半分ほど埋め鉄板を土中に挿しているが、蔵骨器が半地中にある状態で儀礼を行ったのであろう。

また、木炭を覆土中に含むものもあるが所謂木炭槨とは言える程の木炭を含まないものが多い。春日部市浜川戸遺跡では土坑の壁面が焼けており、焼骨を蔵骨器へ入れた後、その場に埋納したものと考えられる。鳩ケ谷市三ツ和遺跡例のように蔵骨器を持たないとされる火葬墓は土坑の壁が焼けているものもみられる。

ⅲ古墳の再利用

東松山市代正寺遺跡の１例のみである。石室内

の出土ではなく周溝覆土中から火葬骨の入った蔵骨器が出土した。

１－４．火葬墓の分布

県内の火葬墓は、管見にふれる限り 33 遺跡と、同じ武蔵国であった南武蔵と比較すると決して多い遺跡数ではない。しかしながら地域ごと火葬墓のありかたに違いがみられ、ある程度のまとまりとして捉えることが可能である。先述の分類をふまえて地域別に整理したい（第２図）。

ア　北武蔵台地・本庄台地・妻沼低地（火葬墓散在地域）

蔵骨器の器種・材質ともに共通性がなく、散在している。

深谷市宮林遺跡は、８世紀後半の展開期の火葬墓にあたる。鉄板が出土しており、南武蔵と共通する点がある。Ｄ類の壺を蔵骨器としている。８世紀後半の深谷市皿沼西遺跡はＦ類土師器甕を蔵骨器とする。行田市内ではＧ類が出土している。

イ　比企丘陵～岩殿丘陵

岩殿丘陵出土の火葬墓は８世紀代の兎山出土蔵骨器をはじめとし、その後は南比企産の須恵器甕や壺を蔵骨器とし、須恵器を蔵骨器とする傾向が強い地域である。

児沢北遺跡や大平遺跡・物見山遺跡では火葬墓が９世紀に展開する。この地域の火葬墓は丘陵上の先端部ごとに各火葬墓が占地し、蔵骨器の器種や蓋の組み合わせも等質的である。

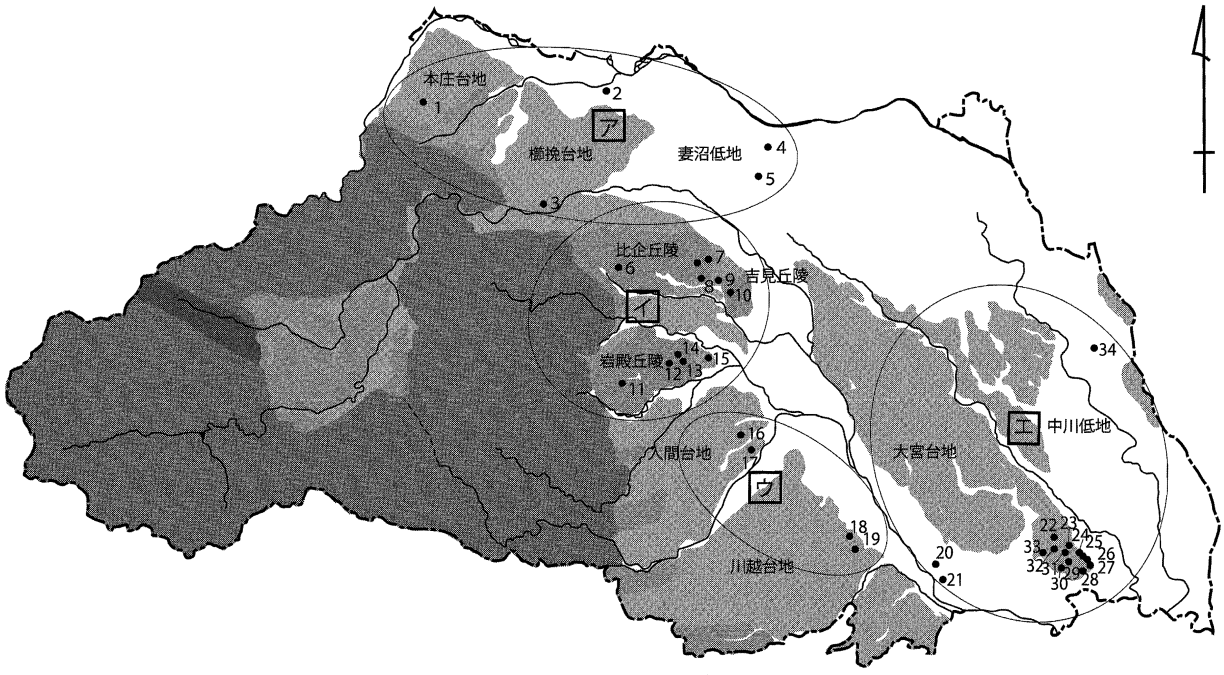
渡辺一によれば物見山遺跡周辺で仏教遺物が出土した竪穴住居が発見されており、火葬墓も竪穴住居に関連した集団のものと考えている。（渡辺 2006）。例外として熊谷市東山遺跡のようにＦ類の土師器甕を蔵骨器とする遺跡も存在する。この火葬墓群は古墳群内に造墓されており、１世紀以上の間隔が開くが、古墳群の被葬者との関連をどう捉えるか問題である。

ウ　入間台地～川越台地

富士見市松山遺跡ではＤ類が出土している。ふじみ野市鶴ヶ舞遺跡でＡ類、川越市鯨井新田のＡ類の短頸壺を蔵骨器とする火葬墓等がみつかっている。出土例は少ないが須恵器を蔵骨器として採用する傾向にある地域である。

エ　大宮台地・中川低地

川口市域およびさいたま市域は８世紀後半以降の火葬墓が展開する地域である。さいたま市域で



第２図　火葬墓の分布

は、E類の蔵骨器が単独で発見されている。川口市域では叺原遺跡と赤山陣屋遺跡のそれぞれが火葬墓群としてまとまっている。その他、宝泉寺遺跡等、群として捉えることが可能な遺跡もあるが、詳細は不明である。

中川低地に位置する遺跡は春日部市浜川戸遺跡のみである。旧国でいう下総国に属する。8世紀前半にF類の土師器甕を倒立させて埋納したものに、2－①にあたる土師器坏をのせて蓋としている。8世紀中頃にはD類の須恵器壺を蔵骨器とするものは坏を伴っており、出土状況がはっきりとしないが2－③にあたる可能性がある。

ア～エの地域の火葬墓のありかたを比較すると、西よりのイの地域はC類の須恵器甕、D類の須恵器壺が多くを占めるのに対し、東よりのエの地域では、A類の須恵器短頸壺・E類の須恵器長頸瓶・F類の土師器甕が好んで使用される。また、西寄りの地域は蓋の分類でいう2－①や2－②の組み合わせが優位であるが。東よりのカの地域では、蓋を複数伴うものや1－②・1－③・2－③など、土器被覆の火葬墓がみられ、東寄りの地域ではみられないものである。材質でも差異があるほか、蓋の組み合わせにも差異が認められることが指摘でき、各造墓集団の蔵骨器の材質の嗜好性や儀礼の違いを物語っている。

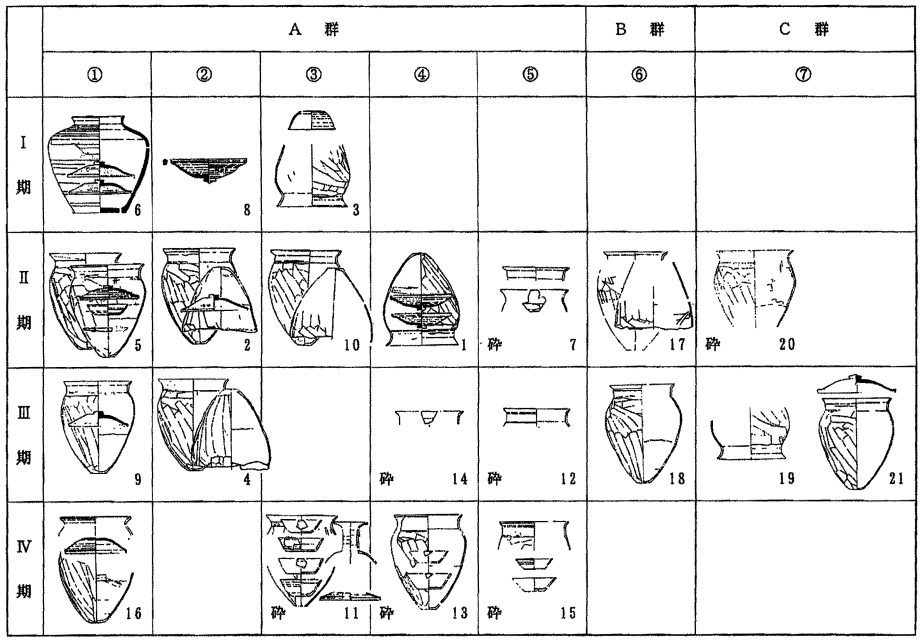
2．火葬墓の導入期と展開期

1では地域ごとの特徴をまとめたが、埼玉県内で地域性が如実にあらわれることがわかった。2では、埼玉県内の火葬墓の導入と展開について考察をおこないたい。

2－1．導入期の火葬墓

火葬の風習がどこから取り入れられたのか考える際にまず先に考えられるのは、畿内地域からの影響である。関東の石櫃をもつ火葬墓について論じた小林義孝は火葬墓の受容について典型的な火葬墓が畿内地域から各地域に導入され、下位階級に導入される過程で在地化し、バラエティーに富んだ火葬墓が登場するとした（小林 2000）。

畿内地域と他地域の火葬墓について比較がなされた先行研究としては、小田祐樹による大和・河内国の火葬墓と北部九州の火葬墓を比較検討した研究があげられる。北部九州では、薬壺形の短頸



叺原遺跡火葬墓群の変遷図（渡辺1987より長谷川1989の系譜分類をもとに改変）
＊「砕」は、土器等が破砕されて埋納されていたものをあらわす。

第3図　川口市叺原遺跡火葬墓の変遷（春日 2000 を引用）

壺を土坑内に入れるものが時期的に古く、各地で共通した様相を示している。このことから共通の外的要因により導入された可能性が高いとしており、僧侶の介在を想定した（小田 2011）。

それでは県内ではどのような状況であったのであろうか。火葬墓の構造について項目ごとに分類を試みたが、世紀単位では時期がわかるが、細かく時期決定しにくい例があるという問題点がある。時期がわかるものでは、F類の8世紀前半の春日部市浜川戸遺跡のE類、そのほかの北武蔵の地域ではA類の須恵器短頸壺が8世紀中頃から後半にかけて各地で登場する。続いて8世紀後半以降となるとC類～G類が登場するというおよその傾向がつかめる。

北武蔵では8世紀中頃を導入期とし、8世紀後半～9世紀前半以降を展開期とすることができる。さらに細分するならば、イの地域では8世紀中頃が導入期で、エの地域では春日部市浜川戸遺跡は8世紀前半、大宮台地の遺跡が8世紀後半となる。

アの火葬墓散在地域以外のイ～カの各小地域では、A類の短頸壺が出土しており、年代的に他の火葬墓よりも先行する。このことから、いささか乱暴ではあるが、北部九州のように火葬導入の契機となる火葬墓として、A類を蔵骨器とする火葬墓が造墓されたのではないかと考えられる。

先述の通り川越市鯨井新田出土の蔵骨器や、川口市赤山陣屋跡遺跡の12次調査1号墓では外容器を伴っており、後代の火葬墓よりも優位性が認められる。この葬法の類型を上位の階級が取り入れ広まったものと考えられる。

ただこれを裏付けるには、同一の群内にA類がみつかっていない場合は別の造墓集団、異なる立地の火葬墓同士の関係を証明しなければいけない。

また、春日部市浜川戸遺跡のF類は、A類の登場よりも古いが、北山峰生による火葬墓の研究では、奈良県内ではすでに金属製蔵骨器、石櫃、薬壺形短頸壺、土師器等の転用蔵骨器は8世紀前半には全て揃うという（北山 2008）。これをふまえると、浜川戸遺跡では短頸壺以外のE類を取り入れたのであろう。他地域とは違う様相を示している。北部九州では導入に際しては斉一性があるが、埼玉県内ではそれが言い切れない状況にある。

2－2．展開期の火葬墓について

武蔵型甕を蔵骨器とする火葬墓を中心に展開期になると、各小地域ではA類以外の火葬墓が増加する。導入の契機となった火葬墓との材質や蓋の種類の差をどのように理解してゆけばよいか問題となるところである。

火葬の展開について検討するにあたり、資料が比較的揃うエの地域に焦点を当てたい。

エの地域で特に注目したいのは川口市叺原遺跡で、8世紀後半から10世紀前後までの火葬墓21基が出土した火葬墓群である。第3図は春日肇の叺原遺跡の火葬墓の変遷図を引用し掲載している。Ⅰ期が8世紀後半で、Ⅱ期が9世紀前半、Ⅲ期は9世紀後半、Ⅳ期は10世紀前後となる。Ⅰ期の8世紀後半にA－2－③・F－2－①・H－1－①が登場し、Ⅱ期の9世紀には土器被覆が登場し群内での火葬墓のバリエーションが一気に増えるのがわかる。この類型に着目し、1で述べた土器被覆の定義に基づいて関東地域で類例を求め、展開期の火葬墓について考察したい。

土器被覆は、南武蔵、千葉県北部の下総国域、茨城県南部に位置する霞ヶ浦周辺といった一部の限られた地域で確認されている。表は土器被覆の蔵骨器が出土した遺跡内での蓋の内訳である（第1～3表）。共通性を見出すためにも埼玉県内での蓋の分類に当てはめ提示した。以下、各3地域を概観する。

南武蔵にあたる東京都と神奈川県の一部の地域では、有間川流域や鶴見川流域に火葬墓が集中している。埼玉県のエの地域のように、土師器甕を

第１表　東京都・神奈川県（武蔵国域）における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	１－① 蓋なし	１－② 蓋なし＋土器被覆	１－③ 蓋なし＋土器被覆（二重）	１－④ 蓋なし＋甕	２－① 蓋のみ	２－② 蓋＋坏	２－③ 蓋が２点以上	２－④ 蓋＋土器被覆	２－⑤ 蓋＋甕	３ 蓋＋外容器	その他	不明
大塚遺跡	八王子市大塚		1										
上布田遺跡・下布田遺跡	調布市布田	3	1										
細山坂東谷遺跡	川崎市麻生区千代ヶ丘		3	1									
平風久保遺跡	川崎市宮前区平		1										
有馬１丁目５番出土蔵骨器	川崎市宮前区有馬		1										
有馬２５１０番出土蔵骨器	川崎市宮前区有馬								1				
石原遺跡	横浜市都筑区東片町		1			1							
御殿林遺跡	横浜市保土ヶ谷区				1								

第２表　千葉県（下総国域）における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	１－① 蓋なし	１－② 蓋なし＋土器被覆	１－③ 蓋なし＋土器被覆（二重）	１－④ 蓋なし＋甕	２－① 蓋のみ	２－② 蓋＋坏	２－③ 蓋が２点以上	２－④ 蓋＋土器被覆	２－⑤ 蓋＋甕	３ 蓋＋外容器	その他	不明
あじき台遺跡	印旛郡栄町五斗薪	1	1		1	1							3
五丹歩遺跡	印旛郡栄町龍角寺字五丹歩					1			1				1
五丹歩遺跡南地点	印旛郡栄町龍角寺字五丹歩				1？								2
古込遺跡	富里市七栄字古込								1				
林子原子台遺跡	香取郡多古町水戸字子原子台										2		
巣根遺跡	香取郡多古町水戸字巣根		1										
土持台遺跡	香取郡多古町水戸字土持台		1			1							1

第３表　茨城県における土器被覆の火葬墓

遺跡名	所在地	１－① 蓋なし	１－② 蓋なし＋土器被覆	１－③ 蓋なし＋土器被覆（二重）	１－④ 蓋なし＋甕	２－① 蓋のみ	２－② 蓋＋坏	２－③ 蓋が２点以上	２－④ 蓋＋土器被覆	２－⑤ 蓋＋甕	３ 蓋＋外容器	その他	不明
宿ノ内遺跡	ひたちなか市根中						1						
手野町出土蔵骨器	土浦市手野町						1		1				
前谷東遺跡	土浦市田村町												1
東原遺跡	土浦市田村町	2	1						1				
八幡脇遺跡	土浦市沖宿町		1			1			1			２－②＋土器被覆	4
石橋南遺跡	土浦市沖宿町								1				
石橋北遺跡	土浦市沖宿町					1			1				
尻替遺跡	土浦市沖宿町		3										
陣屋敷遺跡	稲敷群美浦村根本		1						1				
若海出土蔵骨器	行方市若海											２－③＋土器被覆	
古堂遺跡	結城郡八千代町栗山										1		

蔵骨器とするものが多く発見されている。

土器被覆の火葬墓は比較的川崎市域で多く確認されている。集中して確認できる例は細山坂東谷遺跡のみであり、他の遺跡では同一群内に１点程度の出土となる。これらの土器被覆は蓋を伴わない１－②に偏る。なお、細山坂東谷遺跡では１号墓は地下式坑に納められ、副葬品に鉄板を伴う（戸田 1987）。

千葉県の下総国域にあたる地域のうち印旛郡と香取郡内で土器被覆の火葬墓が確認されている。土師器甕を蔵骨器とするものが優勢で、土器被覆の材質としては須恵器の鉢を利用している。蓋を伴わない１－②と蓋を伴う２－④がある。第２表５～７は香取郡多古工業団地内の遺跡で、樹枝状にのびる台地上に位置している。香取郡多古町土持台遺跡は方形区画墓とともに土器被覆の火葬墓が群をなす遺跡である（三浦 1986）。方形区画墓は台地上を占有するように立地するのが特徴的で、埼玉県ではみられない墳墓である。

茨城県では、霞ヶ関周辺に土器被覆の火葬墓が

集中している。蔵骨器は須恵器甕で土器被覆は須恵器鉢とする。特に集中するのは第４表の３～８で、田村・沖宿遺跡群として知られ、台地上に火葬墓群を形成する。

そのうちの土浦市尻替遺跡内では、土器被覆の火葬墓に農具が副葬されていた（吉澤 2007）。

これら３地域と埼玉県内を概観すると、土器被覆の土器は須恵器か土師器かで材質の違いがあるものの、共通した以下の特徴を指摘できる。

・８世紀後半以降の火葬墓にみられる葬法であること。

・Ｃ類、Ｆ類の日用什器を利用した蔵骨器に伴うものが多いこと。

・火葬墓または土坑墓が群集し、台地上に広く占地する遺跡に存在する傾向がある。

これをふまえると、埼玉県と同じように他地域でも土器被覆の類例が増えるのは８世紀後半以降となっており、展開期に現れる葬法のようである。

高級品であるＢ類にはほとんど伴わず、Ｃ類、Ｆ類の日用什器を蔵骨器とするものがほとんどである点は、各地域で手に入りやすい土器を使用し、対応した結果といえるのではないであろうか。

また、各地域で土器被覆の類型に偏りがあり地域性がみられるものの、埼玉県内での分類以外の組み合わせに大きく逸脱するものがないのは、やはり同じ葬法（儀礼）に基づいて火葬がなされていたことを示唆している。

そして、墳墓が群集する遺跡に存在するという点に関しては、被葬者の階層についても共通性があるようである。

第２表１に掲載している印旛郡栄町あじき台遺跡などの立地の在り方を検討した小林克は土地開発の根拠として火葬墓の造営をしたと考えている（小林 1986）。川口市叺原遺跡も同様と考えられ、香取郡多古町土持台遺跡での、台地上の方形区画墓の占地の状況もそれを思わせる。

開発に関わった人物の墓である可能性があるものとして土浦市尻替遺跡の農耕具が副葬されていた事例がそれを物語っている。少なくとも土地開発に関わりの深い人物が土器被覆をする火葬墓で葬られているということは、重要なヒントであるといえるだろう。

ただ、川崎市細山坂東谷遺跡のように、周辺の火葬墓の被葬者に比べて明らかに優位な立場にある例もある。土器被覆の火葬墓の被葬者が同じ階層であったとは言い切れず、南武蔵の火葬墓集中域の性格を検討する必要性がある。また、同一群内での土器被覆の火葬墓のその他の墳墓の位置づけも必要であろう。

以上の通り、他地域に類例を求めて検討したが、展開期の火葬墓は葬法をどのように採用するかは、結局の所各造墓集団の性格によるところなのであろう。そして、８世紀後半以降に火葬墓の総数とバリエーションが増えるのは、火葬を受容した階層がより広がったところによるといえる。

まとめ

埼玉県における火葬墓は８世紀中頃には短頸壺を蔵骨器とする火葬墓が登場し、８世紀後半～９世紀前半になると火葬墓の類例は増え始め、多様性が増す。埼玉県内でもこの様な現象を見せるのは、社会の変化、造墓する階層の増加や各地域の仏教に対する理解が進んだことも関わっているのかもしれない。

今回は蔵骨器に主眼を向けたが、周辺の集落遺跡や生産遺跡、前代の古墳群についても検討することで、在地の事情を丹念に洗い出すことができるかもしれない。今後の課題としたい。

本稿を作成するにあたり、富田和夫氏・大谷徹氏から資料や遺跡情報のご教示を頂いたほか、職員の方々にアドバイスを頂くなどお世話になりました。深く感謝いたします

第４表　埼玉県の火葬墓一覧

遺跡名	所在地	遺構名	蔵骨器材質・器種別分類	蓋・土器被覆・外容器分類	埋葬施設分類	年代
1 寺山遺跡出土蔵骨器	本庄市寺山		D	※	不明	9世紀
			D	※	不明	9世紀
2 皿沼西遺跡	深谷市上敷免皿沼		F	1－①※	ii	8世紀後半
3 宮林遺跡	花園町永田字台山1369番地ほか		D	2－②	ii	8世紀後半
4 高畑出土蔵骨器	行田市白川戸		G	1－①	※	8世紀
5 小針出土蔵骨器	行田市小針		G	1－①	※	8世紀
7 東山遺跡	熊谷市冑山	1号火葬墓	F	1－	ii	9世紀後半
		2号火葬墓	D	2－①	ii	9世紀前半
		3号火葬墓	※	2－①	ii	9世紀前半
		4号火葬墓	F	※	※	9世紀
6 越畑城遺跡	比企郡嵐山町大字越畑字城山		C	2－①	※	8世紀後半～9世紀初頭
7 代正寺遺跡	東松山市大字宮鼻字代正寺		C	2－②	iii	9世紀中頃～後半
8 大谷出土蔵骨器	東松山市大谷		C	2－①	※	8世紀後半
	東松山市大谷		D	※	※	※
9 畑中出土蔵骨器	東松山市畑中		A	※	※	8世紀
10 西大岡出土蔵骨器	東松山市西大岡		C	※	※	9世紀中頃～後半
11 兎山出土蔵骨器	比企郡鳩山町大字赤沼字兎山		A	2－①	ii	8世紀中頃
12 大平遺跡	比企郡鳩山町大字石坂字大平		C	2－②	ii	9世紀中頃
13 物見山遺跡	東松山市岩殿		D	2－①	ii	8世紀中頃～後半
14 児沢北遺跡	東松山市岩殿字児沢		C	2－②	ii	9世紀中頃
16 鯨井新田出土蔵骨器	川越市大字吉田字鯨井新田		A	3	i	8世紀
17 半沢出土蔵骨器	川越市大字笠幡字半沢		A	2－①	※	8世紀中頃カ
18 鶴ヶ舞遺跡出土蔵骨器	ふじみ野市鶴ヶ舞		A	2－①	※	9世紀以降
19 松山遺跡	富士見市大字水子字地蔵山		D	2－①	※	9世紀中頃～後半
20 八王子富士塚出土蔵骨器	さいたま市八王子富士塚		B	2－①	ii ※	9世紀初頭～中頃
21 大久保領家出土蔵骨器	さいたま市大久保領家道場		E	※	※	9世紀
22 東本郷出土蔵骨器	川口市大字東本郷		A	※	※	8世紀後半～末
			E	※	※	
			F	※	※	9世紀中頃
23 大竹水天宮脇出土蔵骨器	川口市大字大竹		E	※	※	9世紀
24 宝泉寺遺跡	川口市大字大竹字後	1号火葬墓	F	1－④	ii	9世紀前半～後半
		2号火葬墓	F	※	ii	9世紀前半～後半
		3号火葬墓	F	※	ii	9世紀前半～後半
		4号火葬墓	F	※	ii	9世紀前半～後半
		5号火葬墓	F	1－①	ii	9世紀前半～後半
		6号火葬墓	F	※	ii	9世紀前半～後半
25 大竹後遺跡	川口市大字大竹字後		F	2－③	ii	9世紀
26 新郷出土蔵骨器	川口市大字東本郷字新郷		E	2－①	※	8世紀後半～末
27 三ツ和遺跡	鳩ヶ谷市三ツ和・八幡木	1号特殊土壙	H	1－①	ii	9世紀前半～中頃
		2号特殊土壙	H	1－①	ii	9世紀前半～中頃
		3号特殊土壙	H	1－①	ii	9世紀前半～中頃
		4号特殊土壙	H	1－①	ii	9世紀前半～中頃
28 安行吉岡立ノ崎遺跡	川口市安行吉岡		F	1－①※	※	9世紀前半
29 安行出土蔵骨器	川口市安行原		D	※	※	
30 赤山陣屋跡遺跡	川口市赤芝新田字道上		F	1－①	ii	9世紀前半
		11次調査 1号火葬墓	F	※	ii	9世紀後半以降
		11次調査 2号火葬墓	F	※	ii	9世紀後半以降
		11次調査 3号火葬墓	F	※	ii	9世紀後半以降
		11次調査 4号火葬墓	F	※	ii	9世紀後半以降
		12次調査 1号火葬墓	A	4	ii	9世紀前半
31 叺原遺跡	川口市石神	1号火葬墓	F	2－③	ii	9世紀前半
		2号火葬墓	F	2－②	ii	9世紀前半
		3号火葬墓	F	2－①	ii	8世紀後半
		4号火葬墓	F	1－③	ii	9世紀後半
		5号火葬墓	F	2－③	ii	9世紀前半
		6号火葬墓	A	2－③	ii	8世紀後半
		7号火葬墓	H	1－①	ii	9世紀前半
		8号火葬墓	H	2－①	ii	8世紀後半
		9号火葬墓	F	2－①	ii	9世紀後半
		10号火葬墓	F	1－②	ii	9世紀前半
		11号火葬墓	H	1－①	ii	10世紀前後
		12号火葬墓	H※	1－①※	ii	9世紀後半
		13号火葬墓	H※	1－①	ii	10世紀前後
		14号火葬墓	H	1－①	ii	9世紀後半
		15号火葬墓	H	1－①	ii	10世紀前後
		16号火葬墓	F	2※	ii	10世紀前後
		17号火葬墓	F	1－②	ii	9世紀前半
		18号火葬墓	F	1－①	ii	9世紀後半
		19号火葬墓	F	1－①※	ii	9世紀後半
		20号火葬墓	F	※	ii	9世紀前半
		21号火葬墓	F	2－①	ii	9世紀後半
32 天沼遺跡	川口市大字安行吉岡字天沼		D	2－①	ii	8世紀後半
33 西立野道上遺跡	川口市大字西立野字道上		F	1－①	ii	9世紀前半～中頃
34 浜川戸遺跡	春日部市大字春日部字浜川戸	4次1号土坑	F	2－①	ii	8世紀前半
			F	2－①		8世紀前半
		5次1号土坑	D	2－②	ii	8世紀中頃
		7次1号土坑	G？	※	ii	8世紀前半
		7次5号土坑	F	1－①	ii	8世紀前半

引用参考文献

会田　明　1990 「松山遺跡出土の蔵骨器」『研究紀要』第６号　富士見市遺跡調査会
石村喜英　1957 「外容器伴出の一蔵骨器について」『歴史考古』１号　日本歴史考古学会
岩井重雄　1976 「大久保領家出土の蔵骨器」『浦和市郷土博物館研究調査報告書』第３集　浦和市郷土博物館
小川順一郎　1985 『叺原遺跡（歴史時代・図版編）』川口市文化財調査報告第７集　川口市遺跡調査会
小田祐樹　2011 「墓構造の比較からみた古代火葬墓の造営背景 － 畿内と北部九州を対象として － 」
『日本考古学』第 32 号　日本考古学協会
春日　肇　2000 「埼玉県南東部における古代火葬墓について」『埼玉考古』第 35 号　埼玉考古学会
金井塚良一編　1978 『北武蔵考古学資料図鑑』　校倉書房
金井塚厚志　1994 『埋蔵文化財の調査２』鳩山町埋蔵文化財調査報告書第 16 集　鳩山町教育委員会
金箱文夫　他　1989 『赤山』本文編・第２分冊　川口市文化財調査報告第 12 集　川口市遺跡調査会
川口市　1986 『川口市史』考古編
北山峰生　2008 「古代火葬墓の導入事情」『ヒストリア』大阪歴史学会
栗原文蔵　1966 「須恵器利用の蔵骨器二題」『埼玉考古』第４号　埼玉考古学会
黒済和彦　1990 『鳩ヶ谷市三ツ和遺跡』鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書第４集　鳩ケ谷市教育委員会
小林　克　1986 「平安時代火葬墓の性格とその背景」『史叢』第 37 号　日本大学史学会
小林義孝　1999 「古代墳墓研究の分析視覚」『古代文化』51 － 12　古代学協会
小林義孝　2001 「火葬墓はどのように受容され、在地化したか － 関東地方の石櫃をもつ火葬墓を例に － 」
『地域考古学の展開』村田文夫先生還暦記念論文集刊行会
小峰啓太郎　1957 「東松山地方の須恵器蔵骨器」『台地』６号　台地研究会
小野義信　1979 『越畑城跡』埼玉県遺跡発掘調査報告第 20 集　埼玉県教育委員会
鈴木孝之　1991 『大正寺・大西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 110 集
埼玉県立歴史資料館　1988 『也加多』
田口哲也　他　2005 『赤山陣屋跡遺跡』　川口市文化財調査報告第 30 週　川口市遺跡調査会
高崎光司　1991 『児沢北遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 104 集
田中広明　2012 『皿沼西／戸森前』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 391 集
戸田有二　1987 『坂東谷遺跡』坂東谷遺跡発掘調査団
出縄康行　1997 『大里村南部遺跡群Ⅰ』　大里村教育委員会
中野達也　他　2002 『浜川戸遺跡５，６，７、24、25、26 次』　春日部市埋蔵文化財調査報告書第 11 集
春日部市教育委員会
中野達也　他　2005 『浜川戸遺跡１，２，３，４次調査地点』　春日部市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
春日部市教育委員会
並木　隆　1979 『吉岡・東本郷台・上一斗薪遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第 37 集　埼玉県遺跡調査会
秦野昌明　1981 「与野市八王子出土の蔵骨器について」『与野考古学調査報告書』第 10 集　与野市教育委員会
東日本埋蔵文化財研究会　1995 『東日本における奈良・平安時代の墓制』
三浦和信　1986 『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書 － 林小原台・巣根・土持台・林中ノ台・吹入台 － 』
千葉県文化財センター報告書第 102 集
宮井英一　1985 『大林Ⅰ・Ⅱ　宮林　下南原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 50 集
吉澤　悟　他　2007 『尻替遺跡』田村・沖宿土地計画整理事業に伴う発掘調査報告書第 10 集　土浦市教育委員会
渡辺　一　　1986 「叺原遺跡火葬墓群の検討」『叺原遺跡（考察編）』川口市教育委員会
渡辺　一　　2006 「窯業工人と墓」『鳩山の歴史』　鳩山町